

鈴木有郷牧師説教

10/10/10 献金と寄付 ルカ 21:1-4

皆さんは卒業した大学から一年に数回寄付金の要請を受けたことがあると思います。私たちはそういう場合「まあ母校だから仕方がないか」と思いながら、何がしかのお金を送ります。大学は、卒業生から受けたお金を金額に応じてランク付けし、それを大学の出版物に掲載します。これが寄付です。

献金は違います。どのように違うかを理解するために、今朝読んで頂いた貧しいやもめのエピソードに注目してみたいと思います。

貧しいやもめが神殿の献金箱に二枚の銅貨を投げ入れます。それを目に留めた主イエスは、弟子達に言います。「この女性は誰よりもたくさん入れた。何故なら、彼女は出来る限りの額を神に捧げたから。」

銅貨2枚は、現在の20セント位かもしれませんが。つまり、この女性は20セントしか献金できなかったのです。しかし、イエスは貧しさに打ちひしがれているこの女性が、20セントも献金したことに心を打たれたのです。この20セントは豊かな人が持てる中から献金した1000ドルよりも価値があるとされたのです。

献金は寄付と違って宗教的な意味を持つ言葉です。つまり献金は神への捧げものなのです。この女性が貧しい中から神への感謝として持てるものすべてを捧げたように、献金は信仰の表現です。渋々ながらの行為ではなく、喜びに満ちた行為です。

献金は額によってランク付けされることはありません。何故でしょうか。20セントが1000ドルよりも価値があるとされる場合があるからです。額ではなく、その背後にある献金者の意思、思いが尊重されるのです。

戦時中物心ついたばかりだった私に、忘れられない思い出があります。それは前にこの講壇か、或はVIPの集会でお話したことですが、献金の意味を考える上で適切と思うので、もう一度触れさせていただきます。

私が3才の時、母が病気になり、私は母の姉に2年程預けられました。それ以後叔母は私にとって母親と同じように大切な存在となりました。5才の時に私と母は東京の空襲を逃れて長野県に疎開しました。叔母は一度その村に東京からはるばる満員電車に乗って訪ねに来てくれました。

私はその嬉しい知らせを一週間前に聞くと、お米のご飯を食べるのを止めました。好物のトウモロコシも、いんげんも、えだまめも食べるのを止めました。訪ねにきてくれる叔母に食べてもらいたいと思ったからです。それは5才の私の叔母に対する精一杯の感謝の表現でした。

面白いことに、お米やその他の好物を食べずにいることは、まったく苦になりませんでした。私にはそれを楽しく、喜んでしたという記憶だけが残っています。

このように、献金は渋々するものではありません。献金は喜びに満ちた行為です。神への感謝の現れです。

献金は、羊飼いいエスの肩に担がれた子羊が、彼の耳元へささやく感謝の言葉です。「有り難う。有り難う。私を背負ってくれて有り難う。」